

伝大道寺跡遺跡群2

—熊本地方気象台ウインドプロファイラー発動発電機工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2016.3

熊本県教育委員会

伝大道寺跡遺跡群2

—熊本地方気象台ウインドプロファイラー発動発電機工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2016.3

熊本県教育委員会

序文

熊本県教育委員会は、熊本地方気象台ウインドプロファイラー発動発電機設置工事に伴い、予定地において埋蔵文化財の調査を実施してまいりました。

調査の結果、遺構では土抗、柱穴、遺物では布目瓦等を確認し、この地域の様相の一端を知ることができます。

今回の調査によって出土した遺構、遺物により、その当時の人々の生活の様子の一端を知ることができました。

この報告が今までの周辺の調査や、今後調査される発掘資料と併せて、地域の歴史を考える資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただけすると幸いです。

なお、本調査を実施するにあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様を始め、ご指導・ご助言を賜りました諸先生方、熊本市教育委員会並びに同市観光文化交流局文化振興課、事業主である気象庁福岡管区気象台熊本管区気象台に対し、心より感謝申し上げます。

平成28年3月31日

熊本県教育長 田崎 龍一

例言

- 1 本書は、熊本地方気象台のウインドプロファイラー発動発電機設置工事に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、上記工事に伴い、福岡県福岡市中央区大濠一丁目2-36に所在する福岡管区気象台の依頼を受けて熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、全額福岡管区気象台が負担した。
- 3 現地調査は、平成27年6月24日～8月3日に実施し、水上正孝が担当した。現地での写真撮影、図面作成は水上が行った。
- 4 世界測地系での測量基準杭の設定は、株式会社イビソクに委託した。
- 5 整理作業、報告書作成は、熊本県文化財資料室において実施した。
- 6 出土遺物の整理作業は、高瀬美智代・横山明代が担当した。
- 7 道構トレースは、坂本貴美子が行った。
- 8 遺物実測、トレースは、坂本が行った。
- 9 出土遺物の写真撮影は、村田百合子・松木智子・佐藤典子が行った。
- 10 本書の執筆は、水上が行い、文化財資料室長後藤克博の指導のもとに編集を行った。
- 11 遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目1667）に保管している。
- 12 本書中での人名はすべて敬称を省略させていただいた。

凡例

- 1 発掘道構は道構の種別を示す以下の記号と一緒に番号の組み合わせにより表記した。

S A : 墓、柵列 S B : 建物 S C : 回廊 S D : 溝 S E : 井戸 S F : 道路 S G : 池
S I : 竪穴建物 S K : 土坑 S P : 柱穴 S S : 足場 S T : 墓 S X : その他、不明道構等
(本書で使用していない記号も含んでいる)
- 2 道構名称は、区の名称の後に道構記号と番号で表記した。以下の注意点がある。
 - (1) 調査全体をとおして、一度道構番号を付けたものの、調査の過程において道構と認められないと判断した番号については空き番としている。そのため道構名称の最後の番号が、調査区でのその道構の出土数とは限らない。
- 3 現地における土層、遺物（土器類）の色調表記は「新版標準土色帖 2004年版」（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。
- 4 本書で使用している方位は、座標北を示す。
- 5 本書に掲載した地図、道構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。
- 6 出土遺物実測図において以下の注意点がある。
 - (1) 縮尺は土器類が3分の1、3分の1で収まらない遺物は図に明記した。
 - (2) 出土遺物の実測図において、須恵器は、断面を黒で塗色し、その他のものはアミカケにした。

本文目次

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経過

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	発掘調査の経過	1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節	地理的環境	3
第2節	文献調査及び既往の調査	3

第3章 調査の方法と成果

第1節	調査の方法	9
第2節	基本土層概略	9
第3節	調査の成果	9

第4章 まとめ

写真図版

報告書抄録

挿図目次

- 図1 伝大道寺跡遺跡群周辺遺跡地図（古代・近世）
- 図2 伝大道寺跡遺跡群及び調査区位置図（1/5000）
- 図3 調査区グリッド配置図
- 図4 調査区遺構配置図
- 図5 調査区土層断面図及び土層注記
- 図6 出土遺構平面・断面図
- 図7 出土遺物実測図

表目次

- 表1 伝大道寺跡遺跡群周辺遺跡一覧
- 表2 出土遺物観察表

写真目次

- 図版1 調査区完掘状況（南から）
調査区東壁土層断面（西から）
- 図版2 遺構検出状況 SK1・SP3 完掘状況（西から） 根石1 検出状況（西から）
SP1 半截状況（南東から） SP1 完掘状況（南東から）
SP2 半截状況（南から） SP2 完掘状況（南から）
- 図版3 SP4 半截状況（北から） SP4 完掘状況（北から）
気象台露場から南東側を望む SK1 出土遺物（須恵器椀）
遺構外出土遺物（布目瓦）

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

今回報告する伝大道寺跡遺跡群は、熊本地方気象台のウインドプロファイラー発動発電機設置工事に伴い発掘調査を実施したものである。

熊本地方気象台は、明治23年(1890)2月、熊本市被分町(現:水道町)に熊本県立熊本一等測候所として創立され、気象観測業務を開始した。明治35年(1902)1月 熊本市京町に移転し、以後109年間気象観測などの業務を京町で行ってきたが、庁舎の老朽化のため平成23年(2011)2月 熊本市春日に移転した。

移転に伴う平成遠隔場整備事業での塔、倉庫、観測調査の新営工事では、平成22年度に発掘調査を行い古代の土坑、建物の柱穴、軒丸瓦、軒平瓦の破片、江戸時代の土坑、磁器などの埋蔵文化財が確認されている。

そこでウインドプロファイラー発動発電機設置工事に伴い、気象庁福岡管区気象台より、平成27年3月16日付け福気会第250号により文化財保護法第94条の通知が出され、法第99条(平成27年6月15日付け教文第571号)の通知により、熊本県教育委員会が調査を実施した。

発掘調査は平成27年6月24日から、同年8月3日に終了した。

第2節 調査の組織

本工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は熊本県教育委員会が主体となり、熊本市教育委員会の協力を得て実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。

平成27年度(2015)埋蔵文化財発掘調査・整理・報告書作成

調査・整理主体者 田崎龍一(熊本県教育長)

調査・整理責任者 手島伸介(熊本県教育庁教育総務局文化課長)

村崎孝宏(課長補佐)

調査・整理統括 長谷部善一(主幹兼文化財調査第1係長)

調査・整理事務局 松永隆則(課長補佐)

廣石啓哉(主幹兼総務文化係長) 天草英子(参事) 竹馬牧子(主事)

調査・整理担当 水上正孝(文化財保護主事)

調査助言・指導及び調査協力者

気象庁福岡管区気象台熊本地方気象台 熊本市教育委員会

発掘調査作業員 井手春代 脇方範子 堀川民夫 宮田義則

整理報告書作成 坂本貴美子 高松孝子 田中裕子 土田みどり 中島幸子 中村正子

橋本由美子

第3節 発掘調査の経過

現地調査は平成27年6月24日～7月31日に実施した。その間の経過は以下のとおりである。

調査日誌

6月24日 表土剥ぎ、物品搬入、作業員4名で現場作業開始。表土直下は砂利、ガラ混じりの土が黄褐色粘土層上面まで埋まっている。前の建物の布基礎部分のコンクリートが入り、その下から川原石が出土する。川原石の間には細かい黒砂が充填されている。土のう作りを行い、その後搅乱撤去を行う。

6月29日 搅乱撤去。

7月2日 遺構検出のため清掃を行い検出を行うが、はっきりとしたものは少なく、褐色土にしみのように見えるものが多いため、遺構かどうか迷う。根石と思われるものは、時期は不明であるが、平たい大

きな石を取り囲むように川原石が入っているため記録を取る。擾乱内から布目瓦が1点出土した。東側壁面より、1層：表土、2層：客土、3層：暗褐色土層、4層：褐色土（ローム）とする。3層より下がプライマリーな層と思われる。

7月 3日 村崎補佐、長谷部主幹、田尻主事が朝から来探し、検出状況を観察。やはり、遺構が少ないとと言われた。根石も近現代のものではないかとの話であった。平成22年度調査の1・2・3区を遺跡の中心と考えると、調査区が東の崖側にずれていることと、後世の建物から壊されてしまっているためではないかと思われる。SP1～4、6を半裁し、写真撮影、断面記録を進めていく。SP1・2を完掘させる。

7月 7日 4日に撮影できなかったSP4 完掘状況と、SP6 土層断面の撮影を行う。SP3の完掘を行うが、下部に褐色土ブロックが出土するため、SP3の上にSPがあるように思えるが、埋土の明確な違いは無いため、ピットはないと思われる。

7月 8日 根石間の埋土から土師器片が1点出土。根石の時期は新しいと思われる。

7月 9日 東側壁面を清掃し、客土・擾乱の切り合いを見ていく。東壁北側の川原石と黒砂が入った基礎部分は、埋土に混じりが多い。本遺構は、建物の布基礎の下に敷かれたもので、調査区を横切っている。気象台の過去の建物配置図、江戸期の古地図などを見比べていきたい。

7月 10日 調査区平面を実測する。川原石が入っていた箇所などは下端のみを入れ、確実な範囲を入れていくが、範囲がはっきりしない箇所もあり、推定となる。根石2についても石を外してしまった後ため推定となる。

7月 14日 SK1を完屈する。埋土は締まりなく、やや粘性があるが、ボロボロとした感じである。夏場の乾燥の影響であろうか。埋土はフカフカした感じから一度に埋めたようである。出土遺物は須恵器椀の破片が出土した。

7月 15日 調査区完掘状況の写真撮影のため調査区周辺の清掃を実施。

7月 17日 調査区南側を3～5cm程掘り下げて遺構を確認するが検出できなかった。掘り下げと並行して東側の壁断面の実測を行う。

7月 21日 調査区北側を3～5cm掘り下げて遺構を確認するが検出できなかった。作業員による作業は本日までとなる。物品の搬出を行う。

7月 28日 調査区西側の壁面の実測を行う。

7月 31日 西側壁面の実測終了。全調査を終了する。

8月 3日 調査区埋め戻しを行う。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

熊本市は県の中西部に位置し、東に立田山(標高152m)、神園山(標高183m)、小山山(標高189m)、戸島山(標高133m)、西に金峰山(標高665m)、西北部に花岡山(標高133m)がある。西南部には白川、坪井川、井芹川、加勢川、緑川が西流し、これらの諸河川によって上流から運ばれてきた土砂が堆積し、低平な沖積平野が広がる。

遺跡が立地する京町台地は、井芹川と坪井川の浸食を受け、南北に細長く延びる阿蘇火砕流堆積物に起因する火山性台地である。金峰山から連なる山塊と立田山の間には、井芹川と坪井川が約2km隔てて南流し、台地の縁辺部は両河川によって浸食され周辺との比高差20~40mの急崖が取り囲む。台地の標高は、植木付近で約100m、南に向かって次第に低くなり京町付近で約40mとなる。伝大道寺跡遺跡群はその京町台地南部に広がる。台地の南端には熊本城が築かれ、伝大道寺跡遺跡群は、熊本城に近い台地頂部に立地する。標高は35~36mを測る。今回の調査区は遺跡群の南側に位置する。調査区の立地する地形は台地の南端東側の平坦地であるが、東側は急崖である。

第2節 文献調査及び既往の調査

京町台地周辺には、弥生時代(約1,800年前)から江戸時代までの長い間にわたって昔の生活の跡が残る。江戸時代(1722年)に編纂された「肥後國史」には、京町の東側にある仏巖寺の北東に寺があったと伝えられ、この周辺の屋敷から古瓦や基礎等が出土すると記述がある。これらの記述から、平安時代の天台宗「大道寺」があったと推定されているが、現状では明確な位置は確認されておらず、その存否さえも不明確である。しかし、古代の瓦は仏巖寺推定地、熊本地方裁判所一帯、熊本城監物櫓周辺から出土し、京町台の丘陵部を利用した大寺(天台密教に特有な山岳伽藍の配置等)であったとも推定されている。

江戸時代にも京町台地を南北に走る道路は豊前街道であり、豊後街道の起点にもなる交通の要衝であった。江戸時代の絵図によると、豊前街道に面した京町台地の中央部は町人町で、その周辺は、武家屋敷となっている。

1660年代から1670年代にかけて、仏巖寺の隣は春木主税の屋敷になっており、その北側は筑紫左近後家屋敷になっている。

春木主税は細川綱利の直接の家臣で、長柄頭という役職であったと記録があり、子孫も町奉行をしていた家柄である。気象台の南側には春木坂があるが、春木氏が敷地の一部を提供し、道として交通の便を図ったことに名前の由来を持つ。

1750年代から1760年代にかけては、両屋敷の区画は5区画に分かれ、下級家臣の屋敷地となっている。

既往の調査として、平成12年に裁判所の北側、京町台地の東から入る谷沿いの斜地で熊本市教育委員会文化財課が行った第1次調査では、古代の遺構が検出され、奈良時代前葉から中葉の軒丸瓦が出土している。それとともに製鉄関連の工房跡の可能性のある竪穴建物等數軒の遺構が確認されている。

また、同年、熊本地方気象台の北側で実施された第2次調査では、奈良から平安時代の掘立柱建物と溝、江戸時代後半から明治時代の土抗が検出されている。

平成22年に気象台敷地内で熊本県教育厅文化課が行った調査では、土抗を確認している。遺物は、蓮華文軒丸瓦片(7世紀末)が出土している。また、格子目タキ平瓦が出土し、少なくとも奈良時代前期に遡るような遺構が存在した可能性が高いことが分かっている。

(参考文献)

『肥後國誌』森本一瑞 1772

『伝大道寺跡遺跡群』「熊本県文化財調査報告第 293 集」熊本県教育委員会 2013

『熊本城遺跡群古城上段』「熊本県文化財調査報告第 269 集」熊本県教育委員会 2012

「熊本市埋蔵文化財調査年報 第 4 号・平成 11 年度」熊本市教育委員会 2002

「熊本市埋蔵文化財調査年報 第 5 号・平成 12 年度～平成 13 年度」熊本市教育委員会 2003



図1 伝大道寺跡遺跡群周辺遺跡地図(古代・近世)

表1. 伝大道路跡群周辺遺跡一覧

熊本県(43) 熊本市(201)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	備考
201	羽山遺跡群	花園町柿原字羽山		
203	柿原遺跡群	花園町柿原字柿原	縄文～中世	柿原城鹿子木寂心別城
211	本妙寺北	花園町4丁目	古墳～中世	
218	石神原	島崎町3丁目	弥生～平安	
219	千原台遺跡群	島崎町3丁目ほか	縄文～平安	
220	池田	島崎町	縄文～平安	
221	北島遺跡群	池田町4丁目	弥生～中世	
220	池田町(池田小学校)	池田町1丁目	弥生～平安	池田小学校庭柏群
232	一ノ谷	清水町津浦字中寄	古墳～平安	
234	舟塚	清水町津浦	縄文～中世	
235	舟場山古墳	清水町津浦字船場	古墳	円墳、石棺
238	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	
240	京町2丁目	京町2丁目	縄文～近世	
241	伝大道路跡群	京町2丁目	縄文～近世	伝大道路跡を含む
243	安元元年笠塔婆塔身	坪井4丁目	古代	県重要文化財、本光寺
	安元元年笠塔婆	坪井4丁目	古代	市指定建造物
245	藤園中学校校庭	千葉町	弥生～平安	慶柏群あり
246	熊本城跡路群	古城、古京町・千葉町	古墳～近世	
247	熊本城跡	古城、古京町・千葉町	近世	国指定重要文化財・国指定特別史跡、加藤清正慶長12年
248	田端川廻部邸	三の丸・古京町	近世	県指定重要文化財
249	衛門馬場	新町3丁目	古墳～平安	須忠器
254	古町(住居人町)	唐人町・古町ほか	弥生～明治	
255	戸坂	戸坂町	弥生～平安	慶柏群
264	石曽(白川橋)	二本木1・2丁目	弥生～中世	
265	二木本遺跡群	二本木1・2丁目ほか	弥生～中世	二木本国府推定地
270	清水町谷口	清水町万石	臼石器～平安	県調査あり
272	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	
274	室園	清水町室園	縄文～中世	
277	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	
278	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	一部に慶柏群
280	子側	子側町	縄文～中世	
281	大江白川	大江1丁目	縄文～平安	
282	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	弥生環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
283	大江遺跡群	大江3丁目	縄文～明治	
285	木庄(熊大病院敷地)	木庄2丁目	古墳～平安	県大埋文調査室調査
287	木山城跡(木庄城跡)	木山町城の本	弥生～中世	元弘年間にて詫宗直
288	世安池田	世安町池田	弥生～中世	輸入陶磁器など
290	出水園跡	九品寺・國府・國府本町	弥生～中世	
470	池田八幡放牛地蔵	京町	近世	享保10年
471	往生院境内石造物	池田町	中世・近世	豪漸宝鏡印塔・放牛地蔵
472	探釣園跡	坪井4丁目	近世	
473	長岡監物屋敷跡	坪井4丁目	近世	
478	円光寺跡	京町1丁目	近世	藤崎宮社代々墓あり
479	興福寺跡	京町2丁目	近世	
480	興福寺寺境内石造物	坪井3丁目	中世	豪漸宝鏡印塔・坪井の跡
481	お菊園跡	菊園町	近世	藩主重賀開闢
483	新町古寺跡・高麗門跡	新町3丁目	近世	
484	古往生院跡	古鏡治原町	近世	阿弥陀堂石主、六地蔵、十三塔、五輪塔
485	板屋町・細町寺院群	板屋町・細町	近世	
486	願行寺跡	福手町	近世	
487	横手町寺院群	横手町	近世	
534	七軒町	七軒町	縄文～中世	
535	夜塘	小幡町	近世	
536	上河原	黒髪町	縄文～古代	
539	北島五輪塔群	池田町	中世	石造物
540	出町上居跡	京町	近世	
541	光明寺跡	呉服町万2丁目ほか	近世	
544	熊本駅前の石塘	春日町	近世	
545	花畠館跡	花畠町	近世	
548	熊本平野条里跡		古代・中世	



図2 伝大道寺跡遺跡群及び調査区位置図(1/5000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

今回の調査区は、平成22年度の調査第1区の15mほど東側に位置し、調査面積は約15m²である。

発掘調査は重機により表土、近代・現代整地層とコンクリートを除去した。重機での掘削終了後直ちに作業員により人力で撹乱掘削、遺構検出作業を行った。

遺構掘削は人力により行った。検出遺構は半裁し、土層断面図を作成した上で完掘。平面図を作成後、写真撮影を行った。

遺構内出土遺物は、遺構名、検出層位名を付して取り上げた。実測は調査担当者で、1/20の縮尺で断面図、平面図を作成した。

写真は、検出時、遺物出土時、使用時（使用当時の状態）及び掘方時の各段階において、適宜、モノクロフィルムとリバーサルフィルムを使用し、小型カメラ(35mm)と中型カメラ(6cm×7cm)、メモ用にデジタルカメラを使用し撮影した。

第2節 基本土層概略(図5)

1層：表土

2層：近代・現代整地層

3層：暗褐色砂質土(7.5YR3/4)

近代・現代の削平のため、南側のみの
残存である。

4層：褐色土層(7.5YR4/4) 遺構検出面
本層の上面が古代の遺構検出面。

第3節 調査の成果

(1) 遺構と遺物

① 土坑

S K 1 (図6)

調査区の中央部に位置する。西側を撹乱、北側をS P 3により切られる。平面形は隅丸方形で、残存で長軸30cm、短軸20cm、検出面からの深さ38cmを測る。埋土は暗褐色土で粘性は強く、ややしまる。下部に褐色土粒がやや混じる。埋土上部よりも下部は目が粗く、しまりが弱い。一度に埋められた際に締めが下部まで影響しなかったことが考えられるため、人為的に埋められた可能性がある。

出土遺物は須恵器椀(図7-1)が出土した。半裁の際に出土したため、出土位置ははっきりしない。1は底部から体部まで残り、高台は底部端に付き、断面形は方形である。



図3 調査区グリッド配置図



図4 調査区遺構配置図

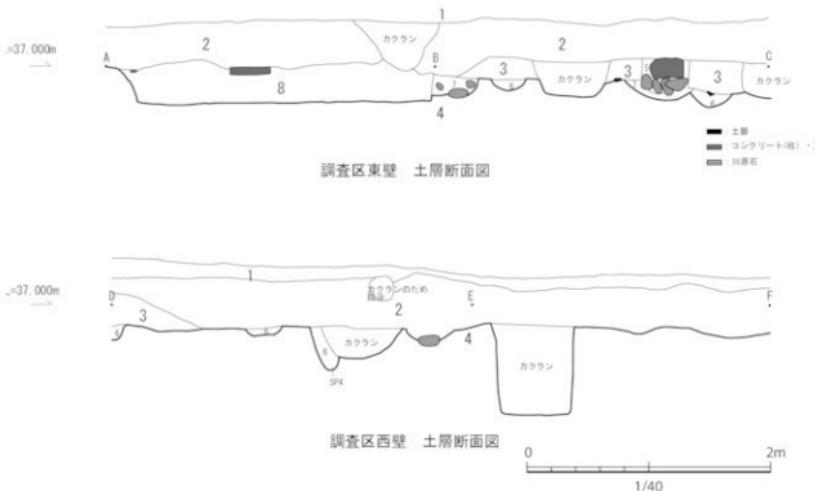


図5 調査区土層断面図及び土層注記

②柱穴（図6）

S P 1

調査区の北東側に位置する。平面形は隅丸方形で、長径 35cm、短径 31cm、検出面より深さ 20cm を測る。埋土は暗褐色土 (5YR3/2) で粘性が強い。上層に褐色土 (7.5YR4/4) の混じりが見られる。遺物は土師器片が 3 点出土した。

S P 2

調査区の北西側に位置する。平面形は円形で、長径 29cm、短径 26cm、検出面より深さ 36cm を測る。埋土は暗褐色土 (7.5YR3/3) で粘性はやや強く、しまりはやや弱い。遺物は土師器片が 2 点出土した。

S P 3

調査区のほぼ中央部に位置する。S K 1 を切り、東側を撹乱に壊される。平面形は隅丸方形に近く、残存で長径 39cm、短径は撹乱に壊されているため 37cm、検出面より深さ 36cm を測る。埋土は暗褐色土 (7.5YR3/3) で粘性はやや強く、ややしまる。中端を持ち、その西端で再び深くなる。遺物は布目瓦片 2 点と土師器片が出土した。

S P 4

調査区の南西側に位置する。平面形は隅丸方形で長径 30cm、短径約 23cm、検出面より深さ 20cm を測る。断面形は西側が深い。埋土は暗褐色土 (7.5YR3/3) で粘性は強く、硬くしまる。遺物は土師器片 1 点が出土した。

遺構外出土遺物

南東側撹乱内から布目瓦（図 7-2）が出土した。丸瓦で内面に布目が見られ、外面は叩き板痕が一部ナデられている。

③根石（図6）

調査区南側で建物基礎の根石を検出した。表出している部分は 13cm 大の礫を中心にして、川原石を敷き詰めた状態であった。堀方は一辺 38cm の隅丸方形で深さは 13cm を測る。掘方面は礫を突き固めてあるため、底部に石の凹凸が残る。埋土は極暗褐色砂質土 (7.5YR2/3) で褐色土 (7.5YR4/4) の混じりが多く、崩れやすい。

30cm ほど左側に同様の根石が出土しているが、撹乱と考え掘削した。調査区南端まで約 1m あるため、根石の建物に伴う基礎跡などが確認されると考えられたが、削平を受けているために基礎跡などの残存は見られなかった。

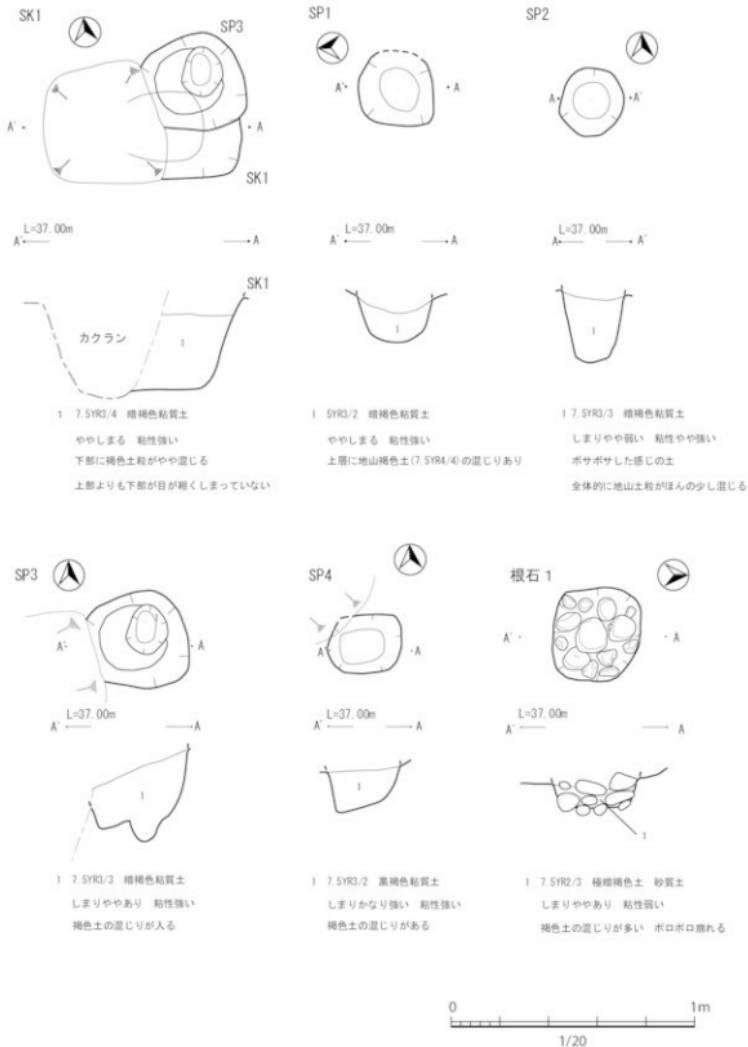


図 6 検出遺構平面・断面図

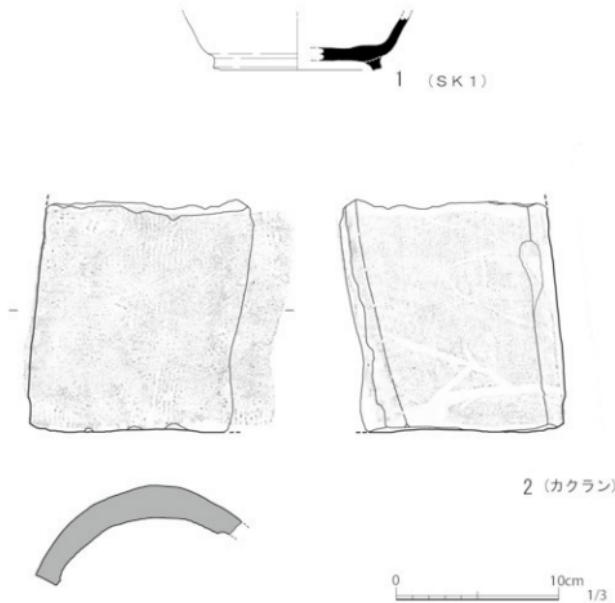


図7 出土遺物実測図

表2 出土遺物観察表

遺物番号		1	2
捕図番号		7	7
写真番号		3	3
出土地点		SK1 3層	カクラン
種別		須恵器	瓦器
器種		椀	瓦
法量 (cm)	口径	—	(全長) (14.2)
	底径	(10.4)	(全幅) (14.0)
	器高	(3.3)	(厚み) 2.0
色調	外面	5Y4/1 灰	10YR7/1 灰白
	内面	5Y5/1 灰	10YR7/1 灰白
調整	外面	回転ナデ、横ナデ ヘラ切り離し後未調整	ヘラ切り離し 縄目タタキ、ナデ
	内面	回転ナデ、ナデ	布目痕
備考		貼り付高台	

第4章 まとめ

調査の結果、今回発掘調査した箇所は削平を受けていたため、遺構の残存状態はいいものではなかった。特に南側は削平により消滅している。

昭和41年の熊本地方気象台実測平面図から、当時3号宿舎が建っていたことが判明した。表土剥ぎの際に抜いたコンクリートは、3号宿舎の基盤であることが文献調査により確認された。

東側断面には、溝状に敷き詰められた割栗石の掘り込みが根石の掘り込みを壊している箇所があり、明治以降、少なくとも2回は削平を受けたことが確認された。

検出した遺構は土抗1基と柱穴6基である。検出したピットで直線状に並ぶものはSP1-SP3-SP4であるが、SP1-SP3の距離は1.9m、SP3-SP4の距離は1.4mと間隔が大きく異なるため、同一の遺構とは認定できなかつた。

出土した遺物は点数も少なく、網コンテナで1箱分であった。遺物の遺存状態も悪く、遺構内から土師器片が出土するものの磨滅しているもの多かった。また、器形復元できるものは、須恵器椀（1）1点で、9世紀前半のものと考えられる。

残念ながら今回の調査区では、平成22年の発掘調査のように寺跡であることが看取できるような遺構、遺物は残存していなかった。周辺での調査事例の増加を待ち、伝大寺跡遺跡群の様相が明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

- 『肥後に於ける回転台土師器の成立とその背景』『中近世土器の基礎研究X』 練田龍生 日本中世土器研究会 1994
- 『奈良時代肥後の土器』『先史学・考古学論究IV－熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集－』 練田龍生 練田考古会 1994
- 『古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器』『先史学・考古学論究V－熊本大学文学部考古学研究室創設30周年記念論文集－』 練田龍生 練田考古会 2003
- 『熊本県における中世前期の土師器について』『中近世土器の基礎研究X』 美濃口雅朗 日本中世土器研究会 1994
- 『伝大寺跡遺跡群』『熊本県文化財調査報告第293集』 2013
- 『熊本市埋蔵文化財年報 第4号・平成11年度』 熊本市教育委員会 2002
- 『熊本市埋蔵文化財調査年報 第5号・平成12年度～平成13年度』 熊本市教育委員会 2003
- 『発掘調査のてびき』文化庁編 同成社 2010

写 真 図 版

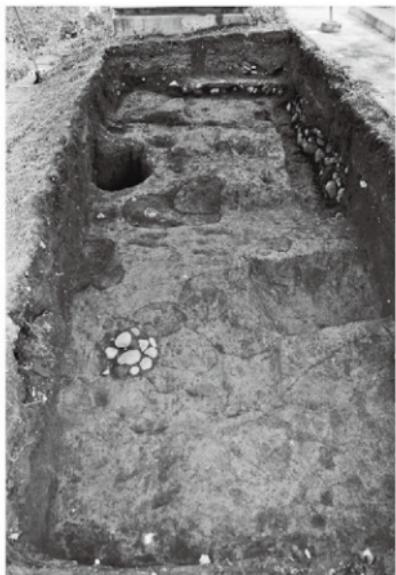
図版 1



調査区完掘状況（南から）



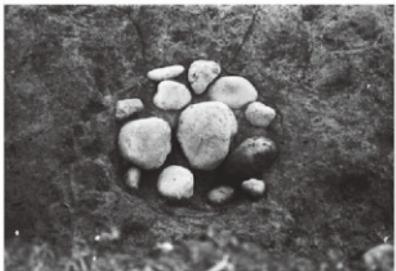
調査区東壁土層断面（西から）



遺構検出状況



SK1・SP3 完掘状況（西から）



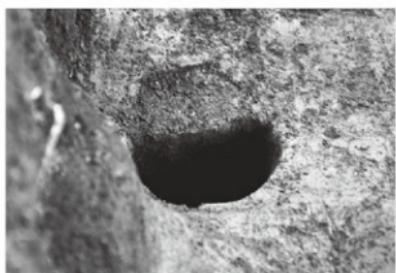
根石1 検出状況（西から）



SP1 半截状況（南東から）



SP1 完掘状況（南東から）



SP2 半截状況（南から）



SP2 完掘状況（南から）

図版3



SP4 半截状況（北から）



SP4 完掘状況（北から）



気象台露場から南東側を望む



SK1 出土遺物（須器椀）



遺構外出土遺物（布目瓦）



報告書抄録

平成28年3月31日 印刷
平成28年3月31日 発行

伝大道寺跡遺跡群2

熊本県文化財調査報告第323集

編集・発行 熊本県教育委員会

〒860-0051
熊本市西区二本木3丁目12-37
コロニーハウス

発行者：熊本県教育委員会
所屬：教育総務局文化課
発行年度：平成27年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第323集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：伝大道寺跡遺跡群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2017年10月5日